

太平樂、右石川樂、長保樂等也、舞終て更に雙調を奏す、管絃にたえたる侍臣等、河竹の北邊にこうす、又樂所の輩も同所のひがしの邊に候て、或は謠、或は吹彈、此間に御膳を供す、又侍臣に仰て御箏を奉る、これよりさきに御座の南邊に置物御厨子一脚をたて、くだんの御箏ををきまうけたり、式部卿の親王和琴を彈じ、源大納言琵琶を彈じけり、御遊をはりて王卿以下に祿を給ふ、又御みきまいりて式部卿親王にたまはせける、親王すなはち御前の階間より庭にをりて、拜舞し給ひけり、南の長階よりのほりて座につく、さらに盃をとりて次第にくだりけり、納言御插頭のまうけ有、獻すべきよし申されけり、

〔上東門院菊合和歌〕一番 左

伊勢大輔

ながきよのためしにうふる八重の花行するとをく君のみに見む

右

伊與中納言

むらさきの匂ひことなる八重の花はつしもよりやわきてをくらむ

〔後拾遺和歌集〕五

上東門院藤原彰子

一條后きくあはせせさせ給けるに、左のとうつかまつるとてよめる、

伊勢大輔

めもかれず見つ、くらさんまら菊の花より後の花しなれば

〔鶉衣〕菊合賦

與成田某

此あるじの菊作るに、すけるすかずは誠にかくあらましや、されば作るべき花のこれならで何ならん、白は吉野の雲をなびかせ、黄は玉川の露をあらそふ、あるは二月の紅にまさり、あるは八橋の紫をうばひて、詩客の車も停むべし、昔をとこの袖もぬれなん、淺深濃淡の色はさら也、花形は百種の新奇を咲て年々に其目をおどろかし、國々に其名を聞ゆ、略中いざ我判者せんといふに、物定のはかせにはあらねど、只賦つくりて其日の笑とはなせりける、